

美しい言葉は外にあるものではない。**美を見出す自分の心の中にある。**

スタンダールは、「恋愛論」の中で、有名な結晶作用を、「それは愛する人が、新しい美点を持っているのを発見する精神の作用である」と言っています。愛すればこそ、あばたも笑くぼに見えるわけです。フランス人のフランス語の愛し方、イギリス人の英語の愛し方、ドイツ人のドイツ語の愛し方、ロシア人のロシア語の愛し方、……これらには皆、それに似た所があります。私たちから見ますと、彼らの自慢している自国語の優れている点というのは、どう見ても「あばた」でしかありません。(フランス語が優美だとか、ドイツ語が明快だとか、外国人が言うのを真に受けて、そうだと思ひ込み、反対に国語に劣等感を持つ学者が多い。国語は、フランス語よりずっと優美で、ドイツ語よりずっと明快で、ロシア語よりずっと文学的で、どこの国にもない荘重さを持っているのではないのでしょうか。)理屈をつけて、やれ優美だとか、やれ社交性に富むとか、明快で科学的表現に優れているとか、こじつけてもっともらしく言い分はしているものの、第三者である私たちから見たら、その言い分は、何ともはや滑稽でしかありません。

それに反して、わが国の学者たちの多くは何とまあ、実に冷静に日本語を愛していることでしょう。あばたを笑くぼに見るところか、笑くぼ

をもあばたに見かねないくらいに、愛すべき日本語を鋭く見つめて、しかも外国人の無責任な批評を気にして、あっちを直し、こっちを直そうとやっきになっています。確かにこれも一つの愛し方でありましょう。愛する人の黒髪を、赤くしてみたり、金色に染めてみたり、外国人の流行を追いかけることに血眼になっている男によく似ているように思われます。これは愛の行為ではない、とは言えないかも知れませんが。しかし、心ある人のなすべき努力ではないようです。

愛は人を盲目にするとされています。愛する者の欠点は気にならぬものです。欠点が気になって耐えられなくなった時は、愛のさめかかっている時に違いありません。だから、真に国語を愛する人は、国語の欠点が気にならぬ、というのが本当だと思います。ぱっちりとした目を美しいものに思っていた若者が、目の小さい恋人を得たら、今度は、目の小さいのをこの上なく愛らしく思うようになるでしょう。それが本当の愛でしょう。欠点と言え、客観的には欠点ではあっても、それがそのまま長所とも見えるのが、「愛の目」というものだと思います。

アナトール・フランスが、「フランス語の『笑う』という言葉は、外国語の『笑う』という言葉とは違います」と言ったあの言い方が、愛する国の、愛する言葉に対する、本当の見方というものだと思います。この自国語に対する誇り、信頼、そして自信。私には、フランス語がそれほど

に美しい言葉だとは、お世辞にも言えませんが、このアナートル・フランスの言葉は、実に美しいと思います。思えば私も、長男の幼年時代に、その、人並はずれて大きいおでこ、それと対照的なペシャンコの鼻、それが世にも比類なく愛らしく、美しいものに思えて、会う人毎に、「まあ、このおでこ、このペシャンコの鼻を見てやって下さい」と、誇らしげに吹聴したのですが、これも今にして思えば、「愛の結晶作用」のなせる仕業だったと思います。

私は、ここで、欠点というものは、矯正する必要などまったくないものだ、などと言うつもりは少しもありません。ただ、不満を持つ人は、よその物は何でもよく見えるものである、ということを目指したいだけです。つまり、同じ大きさのおまんじゅうをもらって、自分のが一番小さく見える人もあれば、一番大きく見える人もあるのと同じです。どんなに良い奥さんを持っていても、心に不満を持てば、愚かな醜女よりも劣って見えることがある、ということをお願いしたいだけです。

世の中には、いろいろの物があって、それで美しくもあれば、楽しくもあるのです。どんなに美人であったか知りませんが、世の中の婦人が皆、クレオパトラのようであったら、世の中はどんなに味気なく、つまらないと思われることでしょう。鼻の高い美人もあれば、鼻の低い美人もある。おでこの美人、目の細い美人、いろいろあるので、この

世は楽しく美しいのだと思います。ばらの花は確かに美しい。しかし、野菊やすみれの美しさも、決してばらに劣るものではありません。まして、どんなに美しいからと言って、この世をばらの花だけの世界にさせるのは御免です。

外国語に接すると、それが国語と、いろいろの点で違いのあることに気付きます。国語に見られない表現、聞き慣れない発音、変だなと思えば変にも思えるし、いいなあと思えば良くも思えます。私も、国語の発音が、時には、単調に過ぎて、英語の変化に富んだ抑揚や、ドイツ語の力強い発音が、「いいなあ」と思うことがあります。しかし、国語の発音が、英語やドイツ語のようであつたらいい、と思ったことは全然ありません。単調には単調の良さがありますし、国語の特徴は、何としても失いたくないと思います。

「国語を愛するが故に、外国語の長所を取り入れるのだ」と言うのは、私は嘘だと思います。それは国語を愛しているのではなくて、実はその外国語の方を、より愛しているに違いないのです。でなければ、少なくとも外国語に魅せられてしまっているのです。そして、自身はその外国語の前に卑屈になっているのだと思います。わが国の国語改革論者と呼ばれる人々は、すべてこういう人々だと、私は思っています。

この国語改革論者の考え違いは、もう一つあると思います。外国語の美しさというものは、言わば、その国という「木」に咲いた花の美しさです。それを国語に移し植えたいと思っても、血液型の違う血液を輸血することはできないように、移せない場合の多いことをよく考えなければいけません。本質的に国語と合わないものを、しゃにむに移植したところで、花が咲くどころか、かえって枯れてしまうしかありません。

また、それぞれの持ち味ということを考えずに、ただ外国語の長所を取り入れようとするのも誤りです。その国だからそれが長所と言えるのであって、それをわが国語に移して果して長所となり得るかどうか、それは軽々しく考えられてはなりません。長所のつもりで取り入れたら、かえって欠点にしかならなかった、ということも大いにあり得ることなのです。単音文字であるローマ字は、それを必要とする欧米諸国語の表記に適しています。それは、ローマ字が欧米諸国の間に発達したのだからです。欧米諸国語の表記には適しているローマ字も、国語の表記にはとても「かな」に及びません。しかし、その「かな」は、欧米諸国語を表記するにはまったく失格です。元来かなとローマ字と、どちらが優れているかなどと論ずべきものではないのです。

欧米諸語の表記には、ローマ字が最も優れています。国語の音韻を表記するのには、かなが最も優れています。漢語の表記には、漢

字が昏で優れています。これは当然のことです。何千年、何百年という長い年月をかけてそれぞれに適するように発達して来たものだからです。麒麟の首の長いのも、鶴の足の細くて長いのも、それが麒麟であり、鶴だから意味があるのです。それは無条件に「首は長いのが良い」ことを意味し「足は細くて長いのが良い」ことを意味するものではありません。漢字がかなのまねをして、仏蘭西とか独逸とかいう表記をすることが機能的だとは言えないように、かなが漢字の領分を侵して、「がっこう」とか「がっそう」とかという表記をしたのでは、不便で仕方がないのです。

意味を持った言葉は漢字で、関係を示す助詞、助動詞はかなで表記するのが、私たちの先祖の発明した最も機能的な表記法なのです。軽々しく、「ローマ字は最も優れた文字である」とか、「漢字は原始的な文字である」とか言うべきものではありません。

同じ盲目でも、自分の恋人に盲目になった者は幸福です。しかし、わが国の国語改革論者のように、他人の恋人に盲目になったのでは、当人は良いとしても、周囲に大変な迷惑を及ぼします。私たちは、アナートル・フランスのように、自国語の美しさを求めて、これを讃美すべきだと思います。